〔和漢三才圖會八十四〕楮　穀音構　構同　穀桑　和名加知、俗云加宇曾、

按楮皮今多造紙、又織布、往昔稱木綿、訓由布、是也、今亦祭祀人被木綿繦者、象上古之衣服乎、

〔廣益國產考五〕楮（からぞ）　かご　又かぞ　ともいへり

楮は畑の堺山畑抔の片下りの所へ作りて、土留となるものにて、年々植かゆるものにあらず、其伐株より芽を生じ、秋に至りて成長し、麥蒔比は藁もてくゝりあげて蒔事なれば、格別作りものの麥やまにならずして益に成もの也、西國邊の山添の村にて、田畑五十石高も持たる百姓にては、楮の皮の乾あげたるを、百把位は收納するなり、一把五目　壹把の價拾五匁と見ても、銀壹貫五百目也、平地の村にても畑の四面に植て、利を得るもの也、此楮に種類多くありて勝劣あり、苗の勝れたるを撰び植べし、

楮之種類　此種類九州にて植る所の名也、國所によりてかはるべし、

一おぶち　上　木肌赤黑く皮厚し、脂氣多く和らかなり、葉の切目黑ひをより深く、木長く伸わきへたれ、製して極白し、又正味多し、此木は暖なる地に植べし、

一丸葉　中　木肌紫黑く皮うすし、脂氣少くして和らかなり、葉丸きにより丸葉といへり、正味少し、併製しては上紙に宜し、正みすくなきにより、おぶちよりおとりたりといへども、紙にすくなし、

一白梶　木肌白し、脂氣なく丸片葉ありて、丸葉目高の間なり、製するにはし、

一目高（たか）　下　丸葉のつぎなり、立伸たる小芽高き故、目高と云、皮うすく葉の切目淺く、片葉は切目あり、片葉は丸葉なり、紙に製してかたし、正味よし、

一黑（くろ）へを　下　木肌白く、皮うすく、紫に見へ厚く脂氣うすく、皮こはし、製して白し、又和らかなり、紙に漉て少しすき惡し、へをの名は鷹のへチより出たる名なるべし、

一白（しろ）へを　下　木肌白く、脂氣薄し、葉は目高に同じ、

一青へを

一なまづを

山楮（やまからぞ）と唱、下品なる紙に交漉種類、

一白くち　一やまず　是は山に立楮にて、年久しきものは壹尺廻り位なる木あり、葉は丸し、山楮といふ、

一むくび　是も山に生立楮にて、葉丸く蔦（かつら）なり、

一桑の皮